【個人研究】

ソーシャルワーク実践におけるミッション意識形成に関する検討
～「超越」と「再統合」の視点より

星野　晴彦*

A study on the development of mission awareness in social work practice— From the perspectives of transcendence and reintegration

Haruhiko HOSHINO

When we look at the history of earlier social workers and the zeal of people who apply to the social work section of Japan Overseas Cooperation Volunteers, we can feel the power with which they have improved themselves through devotion to people in difficult situations who need support. I believe this power derives from the following process centered on mission awareness.

"Social workers devote themselves to their practice. When they have mission-awareness (i.e., when they consider not what they want to do, but what society needs them to do, and give it their own significance) they transcend thinking about themselves and reintegrate with the meaning of their own lives."

In this paper, I examine the above process by surveying the literature. In particular, I discuss the significance of this mission-awareness and how it is formed in a social work practice. I put special emphasis on the significance of transcendence and reintegration.

Key Words: mission awareness, transcend, reintegration, meaning of life ,commitment
ミッション意識　超越　再統合　生きる意味　投げ出す

1．はじめに

高齢化・少子化・家庭機能の崩壊、さらに経済不況も加わり、福祉のニーズは一般化（普遍化）し、個人への支援をはじめ家族や地域を基盤にしたソーシャルワークなどが求められている。ニーズの多様化・深刻化に伴い、ソーシャルワーカーの専門性も一層求められる。しかし、ソーシャルワーカーに対する社会的ニーズがあるにもかかわらず国民にはソーシャルワーカーの存在の認識度またその専門性への理解が乏しく感じられる。さらに近年大学進学の選択にあたり、大学進学者が福祉の学科を避ける傾向も現れている。この困難な状況を打開するため、社会福祉関係の全国的な職能団体・社会福祉従事者養成教育機関・施設・社会福祉関連学会等の、17団体が加盟するソーシャルケアサービス従事者研究協議会は、ソーシャルワーカーデーを設定した。これを契機に社会福祉専門職であるソーシャルワーカーの社会的認知を高め、国民のソーシャルワーカーに対する関心と理解を拡げ、国や自治体、社会福祉事業者等の関係者にソーシャルワーカーの任用・職域拡大及び現任者の待遇改善を要望する機会とすることや、次代のソーシャルワーカーを育てるために、社会福祉士・精神保健福祉士を養成している大学、養

* ほしの　はるひこ　文教大学人間科学部人間科学科

成施設への入学者を促進する機会にもしたいと模索している。

上記の協議会の中心的課題は主に社会の認知度と職場の開拓、処遇の改善そして人材の確保にあると推察できる。このような啓発は確かに重要である。しかし一方では、この時期にこそ、もう一度ソーシャルワーカー自身にとってソーシャルワーク実践がどのような意義があるのかという原点に戻るべきではなかろうか。

ソーシャルワーカーの国家資格（介護福祉士・社会福祉士・精神保健福祉士・ケアマネジャー等）およびそれに関する教育実践は十数年の歴史を経た。ソーシャルワークの技術論をはじめ支援行動の指針である倫理綱領や多岐の領域に渡る専門知識の学習はカリキュラムの中に包含されている。ソーシャルワークの価値・技術・知識に関する豊富な内容が厚くソーシャルワークの原点を包んでおり、ともするとソーシャルワーカーの実践の原点が見えづらくなってしまうのではないか[1]。

ソーシャルワーカーの支援は決して安易な行為ではない。ケアは素晴らしいこととされているが，ケアを引き受けざるをえなくなった人以外は、何かと理由を付けてケアを回避する。自分の存在を賭けてまで他者へケアをすることに恐れをなす。なぜなら相手の襞に踏み込み、自己変容をも厭わない態度で他者へケアを行う～責任を持つこと～は、己の存在が「ゆらぎ」、場合によっては同一性が崩壊する危機に直面するからである[2]。そのようなリスクを伴う支援において、さまざまな壁にぶつかり困難をかかえながらもワーカー自身が、献身しまた持続するには何が必要なのか。

追い討ちをかけるように、職場の人手不足や処遇の低さ、利用者の協力不足、支援ネットワーク構築の難しさ等、多くのワーカーが身体的にも精神的にも厳しい環境に立たされている。このような時こそ、福祉に携わる原点に戻りつつ、客観的に自分を見直し、さらに希望を持ち、先が見えにくい将来に向けて前進する原動力が必要ではないか。社会福祉の先人たちの足跡や、青年海外協力隊のソーシャルワーク部門に志願する人々の熱意を見ていると、苦難の状況にあって、支援を必要とする人々のために献身し、自分たちを高めていくパワーを感じさせられる。このパワーはソーシャルワークの地道な実践の継続を支えてきたと言えよう。筆者はこのパワーは、ミッション意識[3]を中核とする次のようなプロセスにあるのではないかと考えている。

「ソーシャルワーク実践に専心し、ソーシャルワーカー自身の中に、ミッション意識(自分たちがやりたいことでなく、社会から何を求められているのかを考え、自ら意味付けする)を抱くことで、自分へのこだわりを超越し、そして自分自身の生きる意味へと再統合していくプロセスである。」

本稿は上記のプロセスに関して文献研究により検討していきたい。特に、このミッション意識の意義について、そして実践現場においてこのミッション意識がいかに形成されるのかについて論じていきたい。

Ⅱ．メイヤロフのケアの思想

人間への支援に終始するソーシャルワークを考えるには、ワーカー自身がどのように支援の意義を感じているのかを吟味しなければならない。

現場での実践者が自分の支援を振り返り語ったものの中で、深く筆者の心に残った言葉は「じつは自分の方が生かされていたということを実感した」「援助する側にいたと思っていた自分が、援助される対象から生きる力を与えられていたことを実感」[4]、「自分は生きている」「もっと内面的な、人間性を高めてくれる」「幸せってなんだろうと考えるようになった」[5]である。これらの言葉は、自分たちの支援をまとめたような重要な一言であると考えられる。上記のコメントをさらに体系的に考えてみたい。ケアの思想を体系的に整理したことで著名なメイヤロフのケア論をまず取り上げる。彼は次のように述べている。(　)内の太字は筆者の整理したものである。

①（自己実現への支援）

一人の人格をケアするとは、最も深い意味でその人が成長することと自己実現することを助ける

ことである[6]。

②（寄生的ではない関係性）

ケアする際に経験される相手との合一の体験は、寄生的関係で起こる合一とは異なっている。相手を支配したり、所有しようとして試みるのではなくて、私はそれが本来持っている存在の権利において成長すること、またよく言われるように「それらしくなること」を望んでいる[7]。

③（自分を超越した価値）

他者の中に私が感じている価値(かけがえのなさ)は、それが私自身の必要を満たしてくれることによって私に対して持っている価値よりもずっとずっと大きく優れたものなのである[8]。

④（自分をゆだねることによって自分の意味が生まれる）

自己の生の意味を生きることができること(自分を必要とする私と補充関係にある対象を持っていること、さらにそれらに対してケアできること)に感謝している。自分自身をゆだねる機会がもてたこと、また、自分自身をゆだねることができる力量に対しても感謝している。私が他者から受け取るのは、自分を与えているからなのである[9]。

⑤（ミッションの認識）

私は自分と補充関係にある対象の呼びかけに応えるという意味で、使命を持っている。言い換えればそれは他ならぬ私独自の仕事なのである。私は自分自身の独自性に、より大きな意味を深く感じており、またそれこそ自分の使命である[10]。

⑥（真の生の意味を生きる）

他の人をケアすることを通して、他の人々に役立つことによって、その人は自身の真の生の意味を生きているのである[11]。

加えて、このケアの実践について、親が自分自身に得になることを思うのではなく、苦労をいとわず我が子に尽くすといった病気の我が子を思う親を例にあげている。そしてこのようなパターンは、親子・夫婦・精神療法家・教師などケアにかかわるものに共通したパターンであると述べている[12]。上記の言葉、「一人の人格をケアするとは、最も深い意味・・・」「・・・本来持っている存在の権利において成長すること・・・『それらしくなること』を望んで」「自己の生の意味・・・感謝・・・私が他者から受け取るのは、自分を与えているからなのである」「・・・使命・・・私は自分自身の独自性に・・・」「・・・真の生の意味を生きている」からメイヤロフのケア論について、次のようにまとめられよう。

ケアが極めて深い意味をもち、一人の人格の成長をサポートするものである。支援者とサポートを受ける人と二人三脚で自然の形でありのまま歩んでいく。自分自身を与えることを通し感謝の心が生じ、他者の成長を支援していく過程で自分も成長していく。最後に、ケアというものが自分独自の使命であると認識し、自分自身の生きている意義が見つかる。

以上の言説を見ていると、極めて含蓄のある言葉である。特に確認しておきたいのは次の点である。自分を投げ出しゆだねることは、自分の種々の欲求を満たすために他者を利用することとは異なる[13]。これは要請に応答する使命でもある。そしてその専心を通して、自分自身が生きている意味を体感できるというものである。生かされていると感じるのである。フロムの「与えることは与えられることである」という生産的な愛に関する説明と軌を一にすると思われる[14]。フロムによれば、愛は受動的ではなく能動的であり、そして「その中に落ちる」のではなく「自ら飛び込む」ものである。そして与えることであり、もらうことではない[15]彼の言質の根底には、現在の民主主義社会では、人々が「強制されて同調しているのではなく、自ら欲して同調して」おり[16]、個性を失っている[17]世相がある。

Ⅲ．自己の実現と超越

メイヤロフのケア論が「自分を与えることにより自分の生が与えられる」に集約でき、換言すれば「他者へのケアを通して、自分が生きている意味を実現する」ということである。

「自分が生きている意味を実現する」を検討するに当たり、改めてマズローの「自己実現」に言及しなければならないだろう。マズローは人間の欲求について５階層の理論を打ち立てた。「生理的欲求」から「承認の欲求」までの4階層に動機

付けられた欲求を「欠乏欲求」とし、「自己実現の欲求」に動機付けられた欲求を「成長欲求」としている。自己実現の欲求として「可能性、能力、才能の絶えざる実現として、使命(あるいは天職、運命、天命、職責)の達成として、個人自らの本性の完全な知識や受容として、人格内の一致、統合、共同作業へと向かう絶え間ない傾向により動機づけられた欲求」としている[18]。加えて、自己実現という言葉が、自己閉塞的なイメージを抱かせてきたことに触れて、利己的な意味でなく愛他的、人生の課題に対する義務や献身といったことを含む自己超越といった側面、が含まなければならないと説いている[19]。この状態では、自我を忘れ、これを超越し、問題中心的、自己滅却的で、活動に対して最も自然となる[20]。

他方でフランクルを取り上げたい。フランクルは、人は生きる意味を絶えず求める存在であり[21]、探求すべき意味さえ見出すなら、あえて苦しむことも甘受し、犠牲に身をささげ、もし必要とあれば、そのために自らの命をささげる覚悟もする[22]と述べている。そして、医師などが義務によって定められた技術的なことをするだけではなく、その境界を越えていっそう人間的なこと、人格的なことをするときにはじめて、生活に職業から意味を与えられる機会が始まる、と述べている[23]。そして自己に拘らない生き方がその生きる意味を見つけることであると言うのである。

諸富の整理では次のようになる。フランクルの意味への意志論では、「自分はこの人生でなすべきものを行なっている」という確信を求めていく存在であり、自分を越えた向こうからこの意味を実現すべきだと呼びかけてくるのである。そして意味への意志は、自分を超えた向こうからのこの呼びかけに呼応する心の働きである。それに対してマズローは自分を越えた何かとのかかわりは視野に入れておらず、初めから自分の内側にある可能性を実現していくというものである[24]。両者の是非や、特にフランクルと宗教との関係、マズロー自身の欠乏欲求の構造に関する議論についてはこれ以上深く入らない。しかし、大沢[25]はマズロー自身が後年理論を自己修正していく中で、自己実現の必要条件としての価値への志向をいっそう明確に打ち出しているので、フランクルの説く自己超越とほとんど一致するようになったと述べている。すなわち、構造的な両者の見解の相違はあるにせよ、自己実現を最初から求めようとするのではなく、自己超越的な試みにより、最終的に自分の中で一体化され、生きている意味への感覚が充足されていくという点において、共通していると思われる。

しかし、この最終的に自分に対する狭いこだわりを超越し、自分の生きる意味を認識することが、どの段階で現れるかについてマズローとフランクルの見解が一致していない。マズロー[26]によればそれは「欠乏欲求」が十分に満足されてから達成しようとする欲求である。さらに言えばマズロー[27]は、成長への前進は安全であるという感情、安全な基地から無知なところに進むという感情、後退ができるために、あえて強行するという感情によって可能となる、としている。

一方では、フランクル[28]は「欠乏欲求」が満足されなくても達成する可能性がある欲求であると主張している。彼の言説は、ナチスの強制収容所の極限状態で人生における意味を見出すという体験に基づいている。この二つの視点は歴史的にも現状にもソーシャルワークの実践現場から実証されている。

現在のソーシャルワークの実践現場では、支援者の低賃金で生活の維持が困難になることまたは支援者自身の生活の質の低さなどの要因で職場を去っていく例は少なくない。支援者の意欲を継続させるには、彼らの「欠乏欲求」を満たすことが不可欠である。

その一方で、フランクルの体験（生理的・安全的な欲求でさえ満たされない）までにはならないが、ソーシャルワークの先駆者たちは時には助けを必要とする市民のためにもっている豊かな生活だけでなく身を捨てるほど献身的な支援を行った。支援しながら被支援者のニーズを社会に訴え、多くの人たちに支援活動に参加するように呼びかけたり影響を与え、さらに支援を必要とする人々のニーズを国の社会政策の中に組み込み、制度によって保護されるように働きかけた。そして、当初はなかった資源が、やがて彼らの取り組

みによって、後から付いて来るのである。シュワルツ[29]はフランクルの体験が特殊であり必ずしも一般化できるものではないと記述している。同じく先駆者らの実践を全てのソーシャルワーカーに求めることもできないと言えよう。しかし、他者に自分を与えるといった自己の完成の欲求のパワーの大きさは無視してはなるまい。それは自らの生の意義が見つかったからこそ自分の使命が理解できたからこそ、社会にも大きく働きかける力になったのではないか。人間を支援するソーシャルワークといった職業が、ミッション意識により支えられてきたという事実も看過できないであろう。

Ⅳ．ミッション意識の形成

ミッション意識は重要なことであるが、ミッション意識の形成は決して天啓のように唐突に来るものではなく、ミッション意識を形成する複合的要素があると筆者は考えている。では、具体的にミッションは、どのように形成し持続させるかについて、この節で検討したい。

斎藤[30]は、ミッション意識が形成される方法として、「具体的で明確なミッションを与えてくれる人に出会うこと」と述べている。青年海外協力隊の志願者でも、経験者が熱く語ることに大いに触発されたという人が多い。

他方で、企業のみではなく、非営利団体について深い洞察を示しているドラッカーは、責任や貢献について語っている。最高の仕事への動機付けとしてドラッカー[31]は、「外からの恐怖を仕事に対する内からの動機に代えることである。」と述べている。そして、貢献やミッション意識を形成する要素についてドラッカー[32]は次の三点を挙げている。第一は状況が求めるものである（自分を必要とする状況があるか）。第二は自らの強み、仕事の仕方である（自分にできること）。そして第三は成果の意義である（自分の活動によって状況はどう変えられるか）。

要するにミッション意識は能動的なものである。ミッション意識は自分が置かれた環境に流されるものではなく、しっかり自分と自分を取り巻く環境を理解し確認したうえで取り上げた行動である。そしてミッションがしっかりと定まることにより、とるべき行動がおのずと明らかになる。職場環境として、責任や貢献への意識を持たせるためにドラッカー[33]が下記の方法を取り上げている。それが①本人にあったポジションを与えること。「正しい配置」のための真剣かつ継続的、体系的な努力、②仕事について「高い基準」を要求すること、③目標に照らして自らの仕事を評価し、それに対し情報を提供する、④働く者が、環境に働きかけること、等の４点である。この４つの環境条件が整えば責任やミッションの意識が形成されるといったドラッカーの主張に対しマズロー[34]は「成熟度の高い健康な人間にしか当てはまらない」と批判している。この批判についてドラッカー[35]も「直ちに考えを改めた」と承認した。確かに神谷[36]も使命感が精神医学で言うところの「過価観念」となって、視野を狭くして、反省機能を鈍らせてしまうリスクについて言及している。ミッション意識が常に適切に作用するとは限らず、個別性を鑑みなければならないと言うのである。

他方で、ミッション意識は、最初から抱いて業務に従事するものもあれば、日々の実践業務を通して形成されるものもあることも指摘されている[37]。つまり、ソーシャルワーク業務の地道な取り組みの中で、形成される場合もあり、そのような実践の継続を支えるような要素も求められるということである。

ミッション意識はソーシャルワークの実践に重要な動機付けであるが、しかしワーカーは必ずしもミッション意識をもってこの専門職に従事しているわけではない。またミッション意識をもっていても、困難にぶつかり遺憾な思いを残したまま職場を去っていくこともある。ドラッカーが提起した環境条件が与えられたとしても、全てのワーカーは自分自身から能動的にミッションを実現しようすることが難しいときもあると考えられる。ミッション意識の形成・持続にはワーカー自身も環境の整備も両方が必要だと考えられる。

メイヤロフ・フロンクル・マズローの視点―自分が生きている意味を実現する欲求と欠乏欲求の

満たし―そしてドラッカーの具体的な方法を踏まえたところ、ソーシャルワーク実践現場におけるワーカーのミッション意識の形成・持続に関して、次の要素が影響因子として考えられるのではないか。ミッション意識は真空状態で認識されるものではない。次の要素が相互作用的に求められるのではないだろうか。ソーシャルワーカー自身の個別性を重要視しつつも、それを触発する環境づくりや自己理解を促すことも求められるだろう。

＜自己実現のための機会が得られること＞

① 熱意ある体験者の話を聞いたり、活動機会に関する情報などの出会いの場を提供されること。

② ソーシャルワーク実践に従事し継続することが、物理的(体力的側面含み)・時間的(業務に専心することが妨げられない)に可能であること。青年海外協力隊ではしばしば、今の年齢だからできると言う志願者も多くみられる。

＜人格的・人間的な自己の完成＞

① 自己の成長を継続に求め続けること。ここでは自己評価・自己反省を常時に振り返ることが含まれている。特に、自分がしてきたことに対する自信(時には自分たちの資格がどのように現場で求められるのかを再認識したいという思いもあるだろう)なども一つの原動力となるだろう。

② なぜこの専門職につきたいのか。この仕事に自分を委ねる理由は何かを自分に問いかけ続ける。とくに自分がマニュアルに従った行動のみをして、支援の意義を忘れたときにこの問いに戻ることが求められよう。

＜状況の適切な理解＞

ソーシャルワーカー自身が、現在の状況を適切に理解して、何が起きているのか、そして何が必要とされているのかを知る。他方で、自分の強さと弱さと向き合い、自分の強さがどのように活用されるのかを考慮する。

＜その他＞

ソーシャルワーカー個人の自主性のみに帰し、自然と意識が生まれるのを待つのではなく、職場としても本人が成長しようとする意欲を駆り立てる環境づくりに心がけることとして、上記の項目を補足したり促進したりする項目である。ここには、能動的な行動力を育成する環境の整備(技術的・精神的・心理的な支援環境の整備)に加えて、経済的保障や勤務外の自分の時間や場所が確保されることも含まれるであろう。

ミッション意識は一見抽象的な理念であるが、上記の項目に影響されながら、具体的な作業を通してその理念を形成していき、そしてその理念を具体的な実践を通して固めていく。このような往復作業を繰り返していくうち、さらにミッションが明白になり堅くなると考えられる。

Ⅴ．おわりに

ソーシャルワークの実践は先駆者らの無給的な献身活動に始まった。長期間にわたり、その「働きがい」が、無条件に美徳であり、すばらしいことであるとされてきた。ところが、ソーシャルワークの活動が次第に科学的な学問として構築され、専門職として位置づけられるようになった。職業であればワーカーの就職環境・条件も整備するように要求しつつある。さらに経営効率主義の参入により被支援者の状況を無視する支援までにも発展してしまうこともある。このときこそ無償のボランティアと違った専門の技術をもっている支援専門家であるソーシャルワーカーといった職業の原点を吟味すべきである。これは本稿の目的である。

そこでメイヤロフとフランクルとマズローとの論点をもとにその原点を探ってみた。メイヤロフのケア思想はケアの頂点でもあり原点でもあると考えられる。支援活動を通して、自己を超越し、生きる意味を見出すという可能性があるということである。そこでは、マニュアルを超えた、技術論に留まらない支援によって、フランクルが言った職業の意義を見出すことになる。そしてそれを貫くことにより、ミッション意識を形成できるのではないかと筆者は考えている。ミッション意識の形成には「人格的・人間的な自己の完成の欲求」と「欠乏欲求」を同時に満たさなければならない。

ミッション意識の形成は具体的な現場の実践活動と思想の洗練との往復作業を通し形成し固めていくことである。それはワーカー一人のみの努力作業ではなく、その作業をサポートする環境の整備が不可欠である。

その環境の整備は実践現場のみならずワーカーの育成に重要な役割を担う教育の場でも言えるであろう。入学者の確保や支援技術と専門知識の教育などを重んじるなかで、ミッション意識の形成を、教育の現場ではどの程度に重視して行っているのか、教育にあたる我々への重要な問いかけにもなるであろう。

文　献

[1] 冨永健太郎 「戦後知的障害者福祉の父・糸賀一雄を再考することの今日的意義について」,『日本ソーシャルワーカー協会会報』, vol.61,2009,p13

糸賀一雄など先人たちの研究の必要性を説く冨永は次のように述べている。

「今日、社会福祉学やその実践家を育てる教育に欠如しているのは、この思想と実践のダイナミックな往複と双方の緊張関係を学ぶことではないだろうか。それを歴史のなかに落とし込んでゆく作業が見失われている。社会福祉が前進してゆくための羅針盤となる歴史や思想は看過され、切り捨てられる。そして舌触りのよい「福祉マインド」のような骨抜きにされた思想もどきが教育科目に跋扈する。このような今日の福祉教育によって真の実践家が育つとは思えない。」

[2] 鷲田清一『「聴く」ことの力』,阪急コミュニケーションズ,1999

[3] 拙稿 「現在のソーシャルワークに押し寄せる課題」仲村優一監修『ソーシャルワークの可能性』,2005, p35

[4] 荒田寛「現場からソーシャルワークを考える」『現場のちから』,2002, pp355-357

[5] 陳麗婷 「知的障害者の一般就労に影響を及ぼす要因の解明」,『社会福祉学』,48―1, 2007,p72

[6] M.メイヤロフ 『ケアの本質』,田村真ほか訳, ゆみる出版,2009, p13

[7] 前掲　6 , p19

[8] 前掲　6 , p20

[9] 前掲　6 , p176

[10] 前掲　6 , p135

[11] 前掲　6 , p15

[12] 前掲　6 , p15

[13] 前掲　6 , p13

[14] E. フロム『愛するということ』,鈴木晶訳,紀伊國屋書店,2009,p47

[15] 前掲　14, p43

[16] 前掲　14, p31

[17] 前掲　14, p33

[18] A.H.マズロー 『完全なる人間』,上田吉一訳,誠信書房,2009,p31

[19] 前掲　18, x

[20] 前掲　18, p46

[21] V.E.フランクル 『生きる意味を求めて』, 諸富祥彦訳,春秋社,2008, p14

[22] 前掲　21,p15

[23] V.E.フランクル 『死と愛』,霜山徳爾訳,みすず書房,2008,p134

[24] 諸富祥彦 『フランクル心理学入門』,コスモスライブラリー,2009, p95

[25] 大沢博「臨床心理学的人間理解のための一試論」『岩手大学教育学部研究年報』, 30 - 4, 1970, p53

[26] 前掲　18, p31

[27] 前掲　18, p63

[28] 前掲　21, p40

[29] D.シュルツ 『健康な人間』, 上田吉一監訳, 1989, p203

[30] 斎藤孝『働く気持ちに火をつける』文春文庫, 2008, p43

[31] P.F.ドラッカー,『現代の経営』（下巻）上田惇生訳, ダイヤモンド社、1954,pp.180-197

[32] P.F.ドラッカー 『明日を支配するもの』,上田惇生訳, ダイヤモンド社,2009, p218

[33] 前掲31, 180-197

[34] A.H.マズロー 『完全な経営』金井壽宏監訳, 2009, p45

[35] P.F.ドラッカー 『明日を支配するもの』, 上田惇生訳,ダイヤモンド社, 2009, p19
[36] 神谷美恵子『生きがいについて』, みすず書房, 2009, p47
[37] 前掲35, p37

［要旨］
社会福祉の先人たちの足跡や、青年海外協力隊のソーシャルワーク部門に志願する人々の熱意を見ていると、苦難の状況にあって、支援を必要とする人々のために献身し、自分たちを高めていくパワーを感じさせられる。このパワーはソーシャルワークの地道な実践の継続を支えてきたと言えよう。筆者はこのパワーは、ミッション意識を中核とする次のようなプロセスにあるのではないかと考えている。
「ソーシャルワーク実践に専心し、ソーシャルワーカー自身の中に、ミッション意識(自分たちがやりたいことでなく、社会から何を求められているのかを考え、自ら意味付けする)を抱くことで、自分へのこだわりを超越し、そして自分自身の生きる意味へと再統合していくプロセスである。」
本稿は上記のプロセスに関して、文献研究により検討した。特に、このミッション意識の意義について、そして実践現場においてこのミッション意識がいかに形成されるのかについて論じていく。筆者はあえてこの「超越」と「再統合」の重要性を強調したい。